

# 英知の ほとばしり

写真文

津島 修三

〈秋田市在住〉

仙北郡美郷町六郷は、湧水の里としてよく知られている。街の中には主だったものだけでも60カ所余りの清水があり、今でも冷たく清らかな水が湧出している。

六郷の街の中心部は巨木が多く、街全体がすっぽりと森の中に包み込まれているような、とても風情のある街だ。夏の暑い日、六郷の緑陰に憩い、清冽な湧水でノドを潤してみると、「避暑ドライブ」も悪くないだろう。

この六郷の湧水群は、扇状地形のなせるわざであるが、六郷の人たちは、ただ一方的に天の恵みに浴していたわけではない。

ここは、秋田を代表する穀倉地帯である仙北平野の一角でもあり、農民にとって水は生命線。藩政時代から藩は水源域の七滝山の森林伐採を禁止、山の保水力を高め、水源涵養に努めてきた。

米づくり農家にとって、水の確保は最大の関心事の一つ。ことに水不足の年など、地域ごとの水の取り合いとなり、時間で区切つて水を分け合ったり、話し合いがつかない時などは近隣の集落同士で流血事件に発展するような水争いも絶えなかったという。

そのような水との苦闘の歴史の末に生み出されたのが、「円形分水工」と呼ばれる極めて合理的な分水施設だ。

六郷中心部から東方にある関田円形分水工は、丸子川から取水された水が地下を通過して円形のタンクに貯められ、それがタンクの周囲にあげられた180個のオリフイス(孔)から溢れ出す。その水が各地域の受益面積に比例して集められて一本の堰になって流れていく。たとえば、全体の10分の1の水の配分を得る地域は、18個のオリフイスから溢れる水を一本の堰にまとめて引いていくことになる。

この分水工が完成したのは昭和13(1938)年。当時の最先端の分水法だったという。それから70年近くになろうとしているのに、今でも立派に現役で現代社会に役割を果たしているのだから、大いに評価していい存在といえるのではないだろうか。

この分水工の水は、農用水としてだけでなく、地域の人々の生活にも役立つている。分水工のある位置が標高約90m、町の中心部の平均標高が約50m前後。この高低差を利用して、町内の消火栓にポンプを使わずに消防用水を送り続けてきたのだ。

「日本人は、水と平和はタダだと思っている」などとよくいわれることがある。しかし実際には、現代の水風景には、多くの先人の労苦と英知がしみ込んでいるのだろう。一杯の水を飲む時にも、そんな人と水の歴史に、想いを馳せてみたいものだ。



六郷の円形分水工は、美郷町役場六郷庁舎前から東の「六郷温泉あったか山」方向4kmのところにある。現在は小公園風に整備されていて、周辺に水の躍動を眺められる。湧水群が静の水風景とすれば、分水工は動の水風景だ。マイナスイオンも全身に浴びることができるだろう